

令和元年6月24日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04700

研究課題名(和文) 米国西部地区における多文化音楽教育の形成過程に関する研究

研究課題名(英文) Reserch on the formation process of Multicultural Music Education in the Western part of the United States

研究代表者

荒巻 治美 (ARAMAKI, HARUMI)

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：40315180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多文化音楽教育の形成過程について、米国西部地区に焦点をあてて考察した。西部地区は、その歴史的・地理的条件により、社会的・文化的な多様性をもっていたが、その中でも特に、カリフォルニア州に注目し研究を進めた。州、郡、市、学校、教師などの様々なレベルで開発された教育プログラムなどを発掘・収集し、分析・検討を行った。音楽教育の在り方を多文化教育の視点から考察することによって、米国西部地区における多文化音楽教育の形成過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

米国における多文化音楽教育の歴史的展開は、一般に1960年代の公民権運動を起点として研究されてきた。これに対して本研究では、多文化音楽教育の実現にいたる基盤として、その前史に注目する。1910年代から1960年代に至る過程で、社会的・文化的に多様性を獲得していった西部地区を中心として、そこで展開された音楽教育を多文化教育の視点から検討・分析した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study is to clarify the process of forming multicultural music education at the western part of the United States. The western region had social and cultural diversity due to its historical and geographical conditions. We focused on California. We analyzed educational programs developed at various levels such as provinces, counties, cities, schools and teachers. We considered the formation process of multicultural music education in the western part of the United States.

研究分野：音楽教育学

キーワード：多文化音楽教育

1. 研究開始当初の背景

本研究は、米国西部地区における多文化音楽教育の形成過程を明らかにすることを目的としている。これは、1920年代から1950年代のアメリカ音楽科教育の展開を明らかにした一連の研究から着想を得たものである。それらは、平成15-16年度「生活主義音楽教育における創造性開発理論についての基礎的研究」、平成17-18年度「創造性開発を目指す生活主義音楽カリキュラム編成に関する研究」、平成20-22年度「創造性開発を目指す生活主義音楽科授業構成に関する研究」である。当時、学校教育は、生活主義・経験主義の立場から、実験学校において教育実践が試行され、教育研究者によって理論が確立され、一般の公立学校における実践のために各州教育局によって教育要領が公布されていった。生活主義・経験主義教育が音楽科へと浸透するにつれて、1) 当時のアメリカ社会における音楽文化的状況、2) 人間生活とそれに基づく一般教育における音楽科の位置、3) それらを踏まえた音楽プログラムの在り方、が重要な研究課題として意識され始めた。

これに応えるために、シカゴ大学附属実験学校、ミズーリ大学附属初等学校、コロンビア大学附属リンカーン・スクールなどをはじめとした先進的な実験学校で音楽学習が試行実践された。とりわけ、リンカーン・スクールでは、S. N. コールマン (Coleman, S.N.) を中心として、多様な文化における楽器や音楽などについての学習が展開された。また、様々な教育実践の成果をうけて J.L. マーセル (Mursell, J.L.) や L.B. ピッツ (Pitts, L.B.) をはじめとした音楽科教育研究者らは、理論を構築し、一般的な実践のために、音楽教科書を編纂した。生活主義音楽教育は、子どもの発達段階や社会における音楽の在り方に基づいて学習内容を構想するため、多様な社会や文化の音楽を教材として組織するようになる。ここに多文化音楽教育形成のための土壌がつけられたと思われる。このような教育的傾向に加えて、当時、社会的文化的な多様性をもち、活発な教育研究を行っていた地区の一つが米国西部地区であった。そこで本研究では、「米国西部地区における多文化音楽教育の形成過程」を研究課題とした。

2. 研究の目的

本研究は、1910年代から1960年代までの米国西部地区における多文化音楽教育の形成過程を明らかにすることを目的としている。米国の多文化音楽教育は、一般に、二つの側面をもつといわれている。それらは、1) 民族固有の文化を背景としながらその文脈の中で音楽を教える、2) 全ての民族の多様性を基盤としながら社会的平等を目指すことを目的として音楽を教える、の二つである。これらの概念は、多文化音楽教育形成過程の視点から見れば、1) から2) へと変遷してきた歴史的過程であると思われる。本研究では、公民権運動が始まった1960年代までを研究対象とするため、1) の立場をとる。第一次史料に基づき、全米的な多文化音楽教育の動向を踏まえながら、西部地区の教育的特質を浮かび上がらせるとともに、その経緯を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、次のような手順をとった。

- (1) 多文化音楽教育に関して先行研究で明らかになっていることを整理する。
- (2) 国内において入手できる米国西部地区における多文化音楽教育に関する資料の探索・収集を行う。
- (3) 米国西部地区において研究調査を行う。
- (4) 米国西部地区の多文化音楽教育について分析・検討する。

研究初年度には、過年度までの研究成果と資料収集状況を確認し、研究計画を策定した。特に、現在までに収集済みの音楽教科書や各州の教育要領などを中心として、多文化音楽教育の視点からそれらを整理した。その後、西部地区の音楽教育について、とりわけ先進的な教育実践を行っていたカリフォルニア州の音楽教育を中心として研究を進めた。そのために、米国の大学や教育施設において研究調査を行い、資料を収集し、教育の理論的基盤、開発の歴史的な展開、実践の具体的な在り方について多文化音楽教育の視点から検討を行った。具体的には、当時の音楽教育研究者が提唱した理論や音楽教科書、各都市や学校、教育実践家らによって活発に行われた様々な教育実践改革に関する資料などを研究史料とした。それらを分析することによって、1960年代までの西部地区における音楽科教育のあり方を概観しながら、多文化教育の視点から検討・分析した。

4. 研究成果

世紀転換期以降、米国では、西ヨーロッパのみならず東欧や南欧など様々な国々から大量の移民が流入していた。また、一方で学校教育では、生活主義音楽教育の展開により、インディアンや南米の民族など、多様な人種や民族の音楽や楽器に関する学習が行われていった。それは、1910年代以降、先進的な実験学校などで進められていったが、とりわけ、コロンビア大学附属実験学校であるリンカーン・スクールでは、コールマンを中心として多様な国や民族

の音楽や楽器づくりの学習などが盛んに行われた。さらに、同大学の音楽科教育教授のピッツは、音楽教科書『我々の歌う世界(Our Singing World)』を編纂した。それは、西ヨーロッパの音楽を中心としながらも東ヨーロッパの音楽やインディアン、黒人、アジア人などのフォーク・ソングや音楽作品を教材として取り入れていた。また彼女は、インディアンや中国人の音楽に関する単元を開発し、その実践の成果を文献として出版している。1950年代には、例えば、東部地区のニューヨーク州のカリキュラム開発局でも、多様な国の音楽を教材として取り入れた教育課程が提案されていた。

カリフォルニア州には、もともと先住民族が居住していたといわれている。スペイン人が最初に入植し、その後、米国からの移民も増え続け、メキシコとの戦争の結果、米国領となった。1848年から始まったゴールドラッシュとその後の大陸横断鉄道などの線路敷設のために、中国人や日本人を含めた様々な人種や民族の人間が移住してきた。また、1930年代には、多くの農民がこの地方に仕事を求めて移住し、1960年代に至るまで、先住民族、メキシコ、アジア系などの様々な国や民族の人々が居住することとなった。その過程で、社会的・文化的な多様性が生まれ、西ヨーロッパの文化を主流とする米国東部とは異なるものが形成された。従って、カリフォルニア州は、その歴史的・地理的条件により、多文化社会を形成する条件を備えていたといえる。

また、そうした社会的状況などを基盤としながら、学校教育では、生活主義・経験主義の理念に基づいた教育が、様々に実践され、成果をあげていた。1930年代に開発されたカリフォルニア・プログラムは、その一つである。本研究では、それに関する先行研究を検討する一方で、あるべき音楽学習を詳細に構想するために音楽教育関係者らによって組織された初等音楽教育委員会に関する史料を発掘・収集し、多文化教育の視点から考察した。そこでは、「歌唱の開発」、「音楽鑑賞の開発」、「音楽における創造的表現」、「統合的経験としての音楽」、「器楽」などの項目で学習指導例が概略的に示されていた。メキシコや中国などの音楽、あるいはその創作手法や様式を自らの作品に取り入れた西洋音楽の作曲家の学習なども提案されていた。音楽について学習するとともに、それが生まれた背景として、民族固有の生活や文化、生活における音楽の位置や意味などに関して学習が深められていた。

更に、各州や郡、市の教育局の提案した教育課程や実践史料を収集し、多文化音楽教育の視点から分析した。その中でも、特に、ロサンゼルス郡や市の初等学校や中等学校、ロング・ビーチの初等学校や中等学校などの音楽学習内容に注目し、それらを多文化教育の視点から検討・分析した。例えば、ロサンゼルス市の中学校第7学年は、5つの単元(単元1:学校の音楽 単元2:家庭の音楽 単元3:地域の音楽、単元4:我が国の音楽 単元5:世界の音楽)から構成されており、その中の単元5「世界の音楽」では、中南米、南米、北欧、東欧、南アジア、東南アジアなど、約30ヶ国の音楽が教材として扱われていた。ロング・ビーチの初等学校の音楽学習についても、活発に教育開発が進められ、組織すべき音楽経験領域とその内容、音楽学習プランの概要などが検討された。例えば、市によって提案された教育要領には、歌唱経験、基本的学習、聴取経験、統合、創造的経験、リズム経験、器楽経験(打楽器)、器楽経験(オーケストラの楽器)などの項目ごとに内容が組織されていた。各音楽経験領域にはその取り扱いに多少の差は見られるが、多様な国や民族の音楽が教材とされていた。例えば、第三学年の「インディアンの音楽」という項目で、インディアンの音楽と彼らの生活におけるその機能や音楽の様式的な特徴についても学習している。その他に、中国の音楽に関する学習も記述されている。第五学年の「隣人を理解しよう」という学習では、メキシコやキューバ、ブラジルやアルゼンチンなどのラテン・アメリカの音楽が教材とされた。また、「統合」の項目では、単元「メキシコ:マーケットを中心として」で、メキシコの生活や文化について重点的に学習するとともに、そこにおける音楽の位置や意味を更に深く掘り下げて学習させている。さらに、教育要領のみならずロング・ビーチの初等学校第五学年における具体的な教育実践のために、南北戦争当時の南部のプランテーションに関する単元を開発した。それは、音楽領域の内容が充実したプログラムであり、当時の黒人の生活や音楽、それが西洋の作曲家や音楽に与えた影響について学習させるようになっていた。このように、米国西部地区における多文化音楽教育の様々なあり方について、具体的に検討・分析した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。